

『玄文止 諸御抄出処』 解題

大平 宏 龍

此の度、当研究所所員、平島盛龍師によって日隆聖人の『玄文止 諸御抄出処』が翻印されることとなった。無論、これまで未刊であり、管見において、所写本も見出されていない。今回、本抄を隆師研究の為の資料として御紹介できるのは誠に喜ばしい。

本抄は、隆師が制作された文献ではあるが、著作ではない。内容からみてメモ・覚え書きの類に属するものである。作成の目的は、恐らく隆師の『玄文止 三大部略大意抄』を著作するに当たっての準備の為かと推測される。これに類する文献としては、本能寺蔵の『文句要伝』（隆師自筆の内題は『文句の下』（文句のしも））がある。その内容は天台大師の『法華文句』第一巻から第十巻までについて、順次、その内容と関連する内容をもつ宗祖御遺文を列挙し、ある場合には、御遺文中の一節を抄録・取意等して記するものである。これはその筆跡のことも勘案して、恐らく『本門弘経抄』述作に当たっての準備の為と推測される。『玄文止 諸御抄出処』は、天台三大部の全体あるいは部分的内容に関連せる日蓮聖人御遺文の名称あるいは該当内容を示したもので、これに筆跡のことを勘案すれば、恐らく『三大部略大意抄』の著作に当たっての準備の為の制作と考えられるように思われるのである。すなわち、いずれも、宗祖御遺文を能照能開として解釈する為で、隆師の方法論を実施した具体的産物であろう。隆師の著述の成立過程を具体的に知ることのできる資料の一として、貴重であることが理解されるところと思われる。

なお本抄には紙背文書があるが、その内容は今後の検討にまきたい。

以下、注意される点を簡条書とする。

①通称 なし。但し外題は本興寺二十八世日顕師（一六三三～一六八九）によって『玄文止並諸御書出所』とされている。しかしこの名称は後述の如く、隆師真蹟の内題がある上に、内容的にも不適當である。

②具名 玄文止諸御抄出処（真蹟）

③異称 なし

④巻数 一卷

⑤著書 慶林坊日隆（一三八五～一四六四）

⑥著作年 不明。但し『宗要集』『三大部略大意抄』の筆致によく似ており、筆の震えもみられる故に、隆師晩年に近い頃か。

⑦真蹟存否 真蹟存。紙背文書が確認できる。

⑧法量 本紙の部分で二九・〇×二四三・〇糧

⑨形態 現形態は卷子本。もとは冊子本か。

⑩所蔵 尼崎市大本山本興寺

⑪自著の引用 なし

⑫目録 日顕編『御聖教惣目録』（『桂林学叢』第四号、昭和三八年）

本興寺刊『大本山本興寺寺宝目録』平成三年、一五頁

⑬古写本 未詳

⑭ 刊本 未刊

⑮ 内容 末法日蓮聖人の立場すなわち天台内鑑本密の三大部をどう読み解くかの用意として、天台三大部に關する宗祖御遺文の名称と、その言及を集成したもの。従つて題名は「天台三大部の全体あるいは部分的內容に關連する宗祖遺文の該當箇所」の意か。

⑯ 参考文献 大平宏龍稿「『文句要伝』『玄文止諸御抄出処』考」（『興隆学林紀要』第五号、平成三年三月）。大平宏龍稿「日隆聖人教学成立の資料 宗祖御遺文について」（『桂林学叢』第八号、昭和四十九年九月）
⑰ 備考 同様の文献「『文句要伝』とあわせて内容を考察する必要があると思われる。なお、この『文句要伝』に類するものとして、浅井圓道撰『法華品類日蓮遺文抄』（山喜房佛書林、昭和六三年）がある。

付記 今回の翻印に關しては、大本山本興寺御貫首小西日遠猥下の御快諾を頂きました。隆師研究の進展の為に本興寺様の御配慮に甚深の謝意を表する所です。